「活」かし、「生」かすこと。

板橋区立中台中学校３年　一ノ瀬（いちのせ）　蒼（あおい）

飛行機雲がすぐに消えると晴れ。ツバメが低く飛ぶと雨。多くの人が一度は耳にしたであろう、天気に関する昔からの言い伝え。その中には先人たちの生活の知恵がたくさん詰まっているのだと思う。現代では、テレビをつければ天気予報が放送されていたり、新聞をめくれば気象情報が掲載されている。様々な情報が飛び交う情報化社会に生きる私たちには想像がつかないかもしれないが、メディアのなかった時代に生きる先人の残してきた知恵を、便利になった現代だからこそ活かすべきだと私は考える。

天気・天候・気候などの予測に関する昔からの言い伝えを「天気俚諺」と呼ぶのだが、ここで一つ疑問が生まれる。これらの天気俚諺は本当に正しいのだろうか。調べてみると、気象学では説明のつかないものもあるが正しい意味を持ったものも少なくない。例えば、「夕焼けは晴れ」というのは、西空が晴れているから翌日は晴れと予測することで、中緯度地方では天気が西方から変わっていく事実と一致する（低緯度地方では東から変わるので成立しない。）。私も気になり、実際に確かめてみたことがある。「雷が鳴ると梅雨が明ける」。今年の関東甲信地方の梅雨明けは、７月19日ごろだった。前日の18日午後から、東京や神奈川を中心に非常に激しい雨が降り、各地で落雷やひょうが相次いだ。東京でひょうが降ることは滅多にないので印象深い出来事だった。同時に、改めて先人たちの知恵はすばらしいものだと感服させられた。

「故（ふる）きを温（たず）ねて新（あたら）しきを知る」。これは「温故知新」という四字熟語の訓読みである。前に学んだことや事柄をもう一度調べたり考えたりして、新たな道理や知識を見い出し自分のものとする。先人たちは成功と失敗の経験を通して、たくさんの知恵を残してくれている。それをどう活かすのか。この場合「生」かすと書くべきなのか、先人たちの知恵を活用し、決して絶えさせない。私たちの次の代まで伝えていく。その次、また次へと残していくべきだ。活用の仕方は実に様々で、時、場所、場合によって異なるのかもしれない。言い伝えも天気だけではない。先人たちの知恵とどう向き合っていくのか、それは一人一人次第なのだと思う。皆さんも一度考えてみてほしい。興味深いものだと実感し、頬がゆるむことを保証する。

町中にいるお地蔵さんについて

板橋区立中台中学校３年　窪田（くぼた）　彩花（あやか）

みなさんは、町中でお地蔵さんを見たことがありますか。多くの人は、見たことがあると思いますが、お地蔵さんについて詳しく知っている人は少ないと思います。私の家の近くにも、笠をかぶった子安地蔵がいます。母からは、

「この笠をかぶったお地蔵さんは珍しい、子供を守ってくれるのよ。」

と、言われました。そのお地蔵さんの前で手を合わせている人がいたので、私も真似をして手を合わせて、お参りをしたことがあります。しかし、そんな身近な存在なのに、何を祈ってお参りをするのか、町中にお地蔵さんがいる意味など、興味はあったけれど、知らないことが多かったので、お地蔵さんについて調べてみることにしました。

お地蔵さんの本当の名前は「地蔵菩薩（じぞうぼさつ）」といい、親しみを込めて「お地蔵さん」や「お地蔵様」と呼ばれているそうです。「菩薩」とは、仏教の仏様という意味で、他にも「如来」や「明王」など五つの階級に分かれています。その中でも「菩薩」は、悟りを開いて一番高い位になる前の修行中の存在なのです。

お地蔵さんは、中国を経由して伝わり、平安時代から、民間にも仏教が広く浸透するにつれて、地蔵信仰は大いに発達したと言われています。

なぜ、お寺などではなく、道端にいるのでしょうか。お地蔵さんは、弱い立場の人、苦しんでいる人の身代わりとなり、受け止めて下さるのです。だから、人々の住む家の近くにいて、いつも見守っていてくれているのだと思います。平和に暮らせる毎日はきっと、お地蔵さんが近くにいて、私たちを守ってくれているからで、とても心強い存在だと思いました。

お地蔵さんが持っている物にも、意味がありました。右手に持っている「錫杖」と呼ばれる道具は、敵を払う、魔除けの力で、水瓶には、願いを叶える水が入っているそうです。左手には「宝珠」という願い事を叶える力があるとされています。赤い前掛けと頭巾は、生まれてきた「赤ちゃん」を守り、元気に育つようにと、願いが込められてつけられました。

お地蔵さんへのお参りの仕方は、まず、あいさつをします。そして、両手を合わせて、「オンカカカビサンマエイソワカ」という真言を三回唱えるとお地蔵さんが振り向いてくれます。「オン」は「帰命、休養」、「カカカ」は「笑い声」、「ビサンマエイ」は「稀有」、「ソワカ」は「成就あれ」という意味があるそうです。全ての言葉を合わせると、「類いまれな尊いお地蔵さま」という意味です。お供え物は、何でもよいそうです。私は、このようなお参りの仕方があるとは、知らなかったので、真言があることにも驚きました。今までは、お地蔵さんの前でただ手を合わせていただけだったので、次お参りする時は、真言を唱えて、お地蔵さんを呼んでから、お祈りしたいと思いました。

普段、何気なく道端で見かけるお地蔵さんは、私たちの暮らしを支えるかけがえのない存在であることがわかりました。調べてみると、その歴史は古く、様々な言い伝えがありました。けれど、現代の人の多くは、深い意味を知らずにお参りをしているのではないかと思います。お地蔵さんの近くに、詳しい情報や参拝の仕方を書いておくことで、誰もが身近なお地蔵さんについて、詳しく学ぶことができると思います。

このような、古くから伝わる日本の文化や伝統を大事に引き継いで、後世に残していくことが大切だと思いました。

伝統を引き継ぐために

板橋区立中台中学校３年　小沢（こざわ）　梨紗（りさ）

４月が終わり５月に入ると同時に色々な施設や建物に鯉が飾られ空を泳いでいます。気分が沈んでいる時や気持ちを切り替えたい時いつも私は空を見上げます。すると気分が落ち着き冷静さを取り戻すことができます。しかしこの時期は特別で、青く澄んだ美しい空と風に吹かれて優雅に空を泳いでいる色とりどりの鯉がマッチングして色彩豊かな空を見ることができて嫌なことも一瞬で吹き飛ばしてくれます。私はこのようにして私の心を癒してくれるこの風景が世界で一番大好きです。

鯉のぼりとは５月５日のこどもの日に飾られます。ではなぜ、こどもの日と呼ばれる端午の節句では鯉のぼりを飾るのでしょうか。もともと端午の節句とは厄払いの行事です。隣国の中国では旧暦の５月は病気が流行り、亡くなる人が多かったため、菖蒲を門にさしたり、菖蒲をつけたお酒を飲んで厄払いしていたそうです。菖蒲には「元気に１年を過ごせますように」という願いが込められています。

ではなぜ、鯉のぼりをこどもの日に飾るのでしょうか。５月５日は徳川幕府にとって重要な日であるため江戸城で将軍がお祝いする日です。将軍に男の子が誕生すると同日の５月５日に男の子も一緒にお祝いします。その際にのぼりをたててお祝いしたそうです。のぼりをあげることで将軍から武家へ、武家から庶民へ広がっていき、庶民が中国で言い伝えられていた立身出世から鯉の滝登りをイメージし、のぼりに鯉を描き祝い始めたのが端午の節句です。そこには「子供に立派に育って欲しい」という願いが込められています。

鯉のぼりを飾るこどもの日は江戸時代からずっと続いている伝統的な行事です。この伝統的な行事を続けていくために私たち自身ができることは多々あると思います。例えば、私が男の子を出産したら毎年こどもの日に鯉のぼりを飾るということ。これだけで、子供にも５月５日は鯉のぼりを出す習慣であることを自然と理解してもらえるし、近隣の方々も飾る気になってくれると思います。しかし鯉のぼりを絶対に飾ってはいけないと言い伝えられている地域が存在します。その地域には飾ると不幸になってしまうという言い伝えが江戸時代からあるそうです。私はその地域に行って、鯉のぼりに対しての思いを意見交換したいです。地域の方から直接話を聞くことでその地域が考える鯉のぼりについて理解できるし、私たちの地域で伝えられている鯉のぼりについての習慣や想いなどを話すことによってなぜ鯉のぼりを飾るのか理解してもらえると思うからです。

私は今まで鯉のぼりというものを深く考えたことがなく、「今年も色とりどりで綺麗だな」という感覚で眺めていました。しかし、込められた想いに感銘を受け、去年までとはまた違う見方で見ることができそうです。なので来年からは、５月５日という日に込められた想い、鯉のぼりに込められた想いをよく考えながら空を見上げるようにしたいです。

お盆の変化に見る風習の移り変わり

逗子開成中学校３年　中井（なかい）　悠太（ゆうた）

お盆休みに祖父の家へ行った。僕がもっと小さな頃には、仏壇にはほおずきが飾られ、キュウリとナスで作られた牛と馬があったような気がしていたが、いつの間にか見られなくなっており、そのことについて祖父に聞いてみると、お盆の風習についていろいろな話を聞くことができ、その移り変わりに興味をひかれた。

祖父から聞いた話によると、祖父が子供の頃にはもっと多くのお盆の風習が残っていたそうだ。例えば祖父がまだ若く母も子供だった頃には隣近所の各家庭で迎え火、送り火を焚いていたそうだ。祖父によれば、迎え火、送り火とは、８月13日の夕方と８月15日の夕方に、家の玄関先で素焼きの皿におがらという、皮をはいだ麻の茎の部分を折って重ね、火をつけてその火の上を３回またぐのだとか。

しかし、祖父母も高齢となった今では、祖父の家でも焚くのをやめてしまったとのこと。僕自身もお盆の時に夕方の街を歩いていて、迎え火、送り火を焚いているところを見たことは無い。迎え火、送り火がまだ残っている例としては京都の五山送り火など大がかりな物がほとんどである。祖父の家では、精霊のための提灯であるというほおずき飾りも、先祖が乗るとされるキュウリとナスの牛馬も見られなくなってしまった。

先日キュウリとナスなどで馬や牛を作る風習は、車好きだった故人のためにキュウリとナスでスポーツカーを作った、というような例をSNS上で見かける機会があり、風習が形を変えながらも残っていることを知った。また仏壇のほおずき飾りは、ほおずきを提灯にみたてて仏壇に飾るというのだが、関西出身の父は知らないと言っていたので、地域性にもよるのかもしれない。

この様に昔から受け継がれてきた風習が、祖父の代などここ最近で急激に減少、消滅したり、形を変えていっているのは何故なのかについて興味が湧いたので考えることにした。

まず風習がどんなものなのかについて調べてみることにした。風習とは土地ごとに存在する習わしやしきたりのことで、地理、歴史、その地域の産業などによって違いが出るという。漠然と風習とは地域限定の物ではなく、全国的な物だと思っていたが違ったようだ。風習の違いでいい例がある、鰻の捌き方だ。関東では背開きだが関西では腹開きである。これは関東の中心地、江戸が武士の街であったことに関係する。武士の間では腹開きは切腹を連想させるとされ、とても縁起が悪いとされていたので今でも関東の鰻は背開きが多いのだ。

それでは風習が消えていった理由について考えていこう。風習が消えていったのにはいくつか理由があると考えられる。第一に自然との距離である。日本の産業構造が農業中心から工業、商業と変わってきたことと、生活レベルが向上したということから、人々が昔に比べて自然に触れる機会が激減したと考えられる。自然との距離が離れていくにつれて日本古来の自然を畏れ、敬い、感謝するといった宗教的な感情からどんどん遠ざかり、風習の本来の意味が分からなくなり形骸化していく中で消えてしまった物もあると考えられる。

しかし形骸化していく中でも宗教的な意味を薄れさせて娯楽性に重点を置き、残って

いったものも少なくない。最初に話題に出たお盆の迎え火、送り火がいい例だろう。もともと先祖を送り出す神聖なものであるはずだが、今は夏の風物詩、京都の一大イベントとなっている。

第二に人口増加等に伴う、住む環境の変化だ。昔は今のように集合住宅がたくさんあるような環境ではなく、また他人になるべく迷惑をかけないようにしているため、先にも例に出したように迎え火、送り火も各家庭の玄関ではやらないようになった。人口増加そのものによる変化は風習の規模が全体的に大きくなり、必然的にゴミの量が増えたということも考えられる。

風習で使う道具なども昔は自然のもので出来ていたはずなので、ポイ捨てが何も問題にならなかったが、現在では道具がプラスチックになっているうえに地面がアスファルト等で舗装されているので問題になってしまう。そしてゴミの量もとても多くなってしまうのだ。

第三に通信、交通の飛躍的な進歩だ。技術の進歩により地域ごとの特色がどんどん薄れていったと考えられる。全国に広がった物もあれば消えていったものもあるだろう。全国に広がった例としてはよさこい踊りや恵方巻などがあげられる。消えてしまった小さな祭りなどはこのような全国に広がった物に取りこまれていった物もあるのだろう。

海外の情報も技術の進歩により受け取りやすくなったため、クリスマスやハロウィンなどが日本にも取り入れられどんどん変化していっている。こうして地域ごとの独特な風習は減少、消滅していったと考えられる。

このように人々の生活や考え方が変わっていくことにより、風習もまた同じように変化していくのだと考えられる。しかし今も昔も自然と共に生き、また生かされているということを考えると、環境問題が多発している現代では改めて自然との上手な付き合い方というものを考え、風習の本当の意味を考えていくことが必要なのではないだろうか。昔から受け継いでいる風習には、昔の人の生活、考え方を今に伝え、役立てる役割があり、現代の人々が自然と共存していくためにとても役に立つと感じた。今でも続いている風習の意味をもう一度深く考えなおし、先人に感謝する気持ちを忘れず、残していくべき風習は形を変えてもその精神を守り、残していきたいと僕は感じた。

ワイから見える仏教国タイ

逗子開成中学校３年　古田（ふるた）　一歩（かずほ）

「あのタイ人の選手達、速いよな。」

僕は友達にそう話しかけられた。今は、大会の休憩中だ。中一から始めた大好きなヨット。僕は国際セーリング連盟が承認する世界で最も小さいヨットに乗っている。OPの愛称で世界百カ国の子供達に親しまれているこのヨットは、車の上に積められるだけあって、小型で軽量です。OPとは、Optimistの略で、楽天家。国際的に15才までの子供達に許されたOPヨットでは、僕は今年が最後の年となる。中３になり、体重があがり、50kgを越え、僕は物理的に軽い小学生よりも不利な状態だった。そこで、両親に頼んで頼んで、当時市販されていなかった50kg対応のセール（帆）を買ってもらった。そうして迎えた８月４日、５日、６日の江東区で行われたJJYU国際交流日本ジュニアヨットクラブ競技会。世界から５ヵ国（タイ、香港、韓国、オーストラリア、ニュージーランド、ロシア）が集いました。前日まで良い風が吹いていたのにもかかわらず、当日は無風だった。そこで、海上で風待ちの状態が続き、

「これでは、体重の軽い子が有利だ。」

とくやしい気持ちで一杯になりました。大会は、終始微風で、体の大きな子は不利な大会になりました。しかし圧倒的な差をつけ優勝と準優勝をうばったのは、僕と同じか、少しだけ大きい位のタイ人の女子２人でした。体重の不利を技術でカバーし、見ごとに日本勢を打ち破ったのです。ヨットの腕前もさることながら、一番おどろいたのは、受賞式のあいさつだっだ。日本人は、軽く会釈し、賞状や賞品を受け取っていたが、タイの上位２人は違った。その子達は胸の前で合掌をしていたのです。僕は、そこに、日本とタイの文化の違いを感じた。

タイと言えば、皆さん何を思い浮べるでしょうか。僕は寺院を思い浮べます。タイは、人口の約８割が仏教徒だと言われています。『タイ、合掌』で調べると、すぐに見つかりました。その合掌はワイと言って、それは仏教から来ているようです。ワイはタイでは小さな頃から、家庭や学校で、日本で言う“はしの使い方”を学ぶかのように、正しく適切に実践できるように厳格に教え込まれるそうです。このワイの文化は、国民の作法としてしっかりと根付いています。“はしの使い方”と同じく、伝統的なのですね。さらに調べると、ワイというものは、日本の合掌とは、似て非なるもののようです。どこが違うものなのかと言うと、それは形です。手と手をぴったりとくっつけずに、少しふくらみを持たせ、すぼめた形で、仏を象徴する蓮の花のつぼみを表しているそうです。これも、タイが仏教の国であることにも由来しています。

ワイにはいくつかの意味がありますが、主な意味は『相手を尊重する』ということだそうです。これには、タイという国の歴史的な影響があります。タイは1782年に王朝が変遷して以来、実に235年間、王朝が変化していません。僕は驚きました。江戸幕府並の長さです。しかし驚くのにはまだ早かったのです。王朝が変化していないせいで、日本でいう「士農工商」に似たような身分階級社会が今でも続いていて、さらにこの身分階級社会では生まれながらに階級が分かれていて、遊ぶ場所も、住んでいる場所も分けられているのです。身分階級が上の人と交わることは少ないようです。僕は驚くと同時にひどいと思い

ました。しかし、さらにひどいと思ったのは、悪い政治です。少し大げさなのかも知れませんが、調べると、賄賂があって、お金とコネさえあれば、犯罪ももみ消せるといいます。これは日本ではありえないことです。僕は衝撃を受けました。富んでいる者が、さらに富めるように、貧しい者はより貧しくなるそんな不平等な社会がタイにはあるようです。ですが、タイ人の人々は、あまり気にしていないようです。仏教には、輪廻転生の考え方があり、身分の低い人は、ただ、前世の行いが悪かっただけと考え、身分の低い人や不幸な人は、日々の善行によって、来世になったら、身分の高い人に生まれ変われると考えているからです。これが仏教国タイの考え方です。だから、上の階級に上がろうとする人はあまりいないということです。

このように、ワイの由来はたくさんのタイという国の歴史的な影響があります。ワイはタイの伝統的で素晴らしい物です。

ヨットというスポーツは、誰かの助けがないと、何もできません。ヨットだけではなくただの何気ない一日も、誰の手も借りずに生きている人はいません。人間は誰しも一人では生きていけないのです。そこで僕は、ワイのように、いつも相手を尊重し、いつも感謝して生きようと思いました。

小倉織の「縞手本」について

板橋区立赤塚第二中学校２年　宮下（みやした）　開（かい）

僕の母の実家は福岡県北九州市小倉にあります。

北九州の織物には江戸時代からの特産物で「小倉織（こくらおり）」というものがありました。

小倉織は小倉城下町及び近郊に住む士族の婦女子によって織られており、１台から２台の機織を持つ家は、3000戸程あったそうです。

小倉織の特徴は、経糸（たて）１本に対し、緯糸２～３本を引きそろえて平織または綾織などにしたもので、生地がとてもじょうぶだったので、武士の帯やはかまに用いられたり、明治時代の学生服にも使われていました。

しかし、残念なことに、戦時下の昭和初期に途絶えてしまいました。

さて、母の実家には、とても珍しい小倉織の「縞手本（しまてほん）」がのこっています。裏表紙には、

「　明治二十四年
　　縞手本（しまてほん）
　福岡県豊前国（ふぜんきく）企救郡東紫村（ひがしむらさきむら）大字北方（おおあざきたがた）八三一番地
　　井上キク　　」

と書かれています。

この「井上キク」という人は、ぼくの曾祖母の曾祖母にあたる人です。この「縞手本」は井上キクが嫁入り道具として持ってきた小倉織の見本帖です。

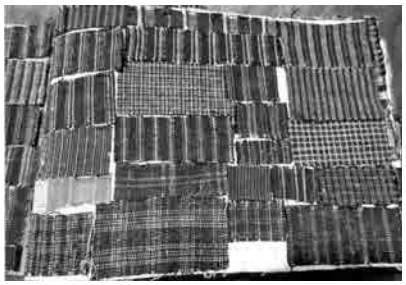
祖母に話を聞くと、祖母が今、住んでいる家で糸をつむぎ、機織機で布を織っていたそうです。今も、実家の物置に機織機と糸車が残っています。

さて、この縞手本は、５センチ×３センチ四方の布が、１枚の紙に20枚ぐらい貼られており、15ページにわたってとじられて３冊あります。合計600枚以上の布が貼ってあって、これらは、自分で新しく布を織るときのデザインの参考にしていました。主に藍染めと草木染めのこげ茶色の縞模様で、様々なデザインのものがあります。合計600枚以上の布にはひとつとして同じ柄のものはなく、これらの布を織った昔の女性たちの工夫にとてもひきつけられました。

また、この中に福岡県の文化財に指定されている「縞手本」と同じ４枚の布があり、とても貴重だということです。120年前のものがそのままの形で保管されているのは、とても珍しいそうです。これからもこれらを大切に後世に残せたらいいなと思います。

祖母の話によると、着物は汚れたら、エプロンのようにして、さらに汚れたら雑巾にも使ってと最後の最後までむだがないように使われていたそうです。

このように、物を無だにしない日本の文化を現代の生活で見習って物を大切にしていけたらと思いました。



お札のひみつ

横浜市立日限山小学校４年　徳安（とくやす）　諒音（あきと）

１、はじめに

お正月におじいちゃんからお年玉をもらいました。お年玉の中にお札が入っていました。お札を明るい場所で見てみるとまん中にうすく絵が書かれてありました。父に聞くと『すかし』というものでした。『すかし』にはニセモノが作られないように偽造防止で役立っていることがわかりました。お札には一体どんな秘密があるのでしょうか。

２、偽造防止

まず、小田原にある国立印刷局へ行きました。ここでは用紙・版面の作成、印刷全てを１つの場所で行う世界でも珍しい工場です。

僕の見つけたすかしの他にもたくさんの偽造防止技術が使われています。

さわってわかる技術で、文字を盛り上げる凹版印刷と、目の不自由の人がさわってお礼の種類を見分ける識別マークがあります。たしかにさわってみるとざらざらしています。

すかしてみる技術には、お札の中央の白い部分にあるすき入れの他にも、人の絵に重ねて縦の棒がすかしになっているすき入れバーパターンがあります。これには気がつきませんでした。

かたむけてわかる技術として、３つの模様が角度によって変わるホログラムと、かたむけると数字やNIPPONの文字が浮かび上がる潜像模様、かたむけるとピンク色にピカピカするパールインキがあります。

道具でわかる技術には、虫眼鏡でないと見れないような小さい文字のマイクロ文字と、紫外線を当てると模様が光る特殊発光インキがあります。

日本のお札はすごくがんばっています。世界で一番使われているのはアメリカのお札ですが、ニセ札の量は日本のお札はアメリカのお札の638分の１です。ニセ札がふえないようにいっそのこと世界中で日本のお札を使えばいいのにと思います。

３、昔のお札

さらにお札について知りたくなったので東京にある『貨幣博物館』へ行きました。

お札は戦国時代にはもうあるものだと思っていました。ドラマなどで市場で買い物するシーンがあるからです。しかし、実際には江戸時代の『山田羽書』がそのはじまりでした。そのころの買い物には『丁銀』という銀の塊を必要に応じて切って使っていましたが、徳川幕府が『丁銀』の切り使いを禁止したためにその代わりとして発行されました。その後各藩内で使用することができる『藩札』が福井藩から初めて発行されました。この『藩札』には偽造防止や数量管理面での対策が十分に施されていました。

藩札の偽造防止技術は大きく分けると用紙の工夫と印刷の工夫がありました。

用紙の工夫は、材料の種類や量を工夫して手触りや色を簡単に真似できないようにしていました。他にも紙を染めたり染めたせんいを混ぜたりされました。そして、おどろくことに、すかしも1660年ころの江戸時代の初めのころから藩札に使われていました。すかしの入れ方もたくさんの方法がありました。

印刷の工夫には、一つのお札を作るのに色毎やパズルのように絵を分解して複数の版木を用意して、版木をそれぞれ別の人が保管することで勝手に印刷できないようにしました。他にも図案を細かくしたり、図案の中にすごく小さな隠し文字を入れたり、普通の人では読めないような外国の文字を使ったりしていました。

やっていることは今も昔もあまり変わっていないことがわかりました。

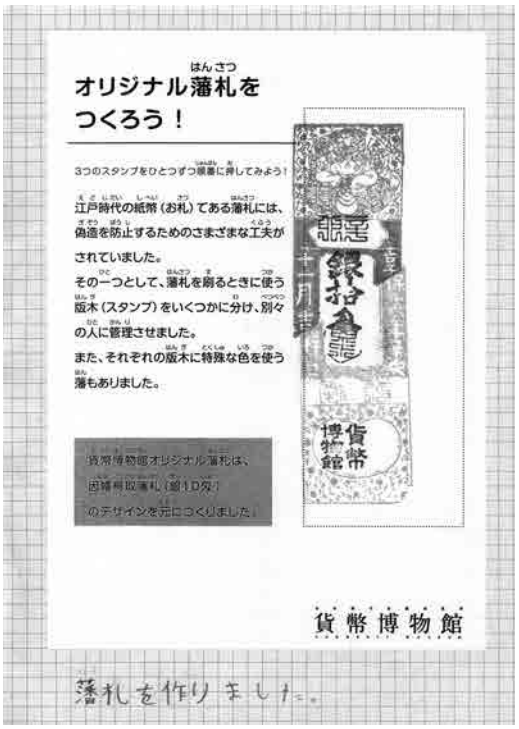
4、まとめ

お札にはいろんな秘密が詰まっていることがわかりました。それは江戸時代に初めてお札が登場したころと大きく変わっていないことがわかりました。日本は世界的に見てものすごくニセ札が少ないです。これは昔から日本人がお金の大切さをよく理解し、ニセ札が作れないような高い技術も昔から工夫されてきた結果ということでしょう。思っていたよりもお札の歴史は短かったです。また、偽造防止技術も基本的には今も昔も変わっていないことにおどろきました。

これからお札はどうなっていくでしょうか。用紙や印刷の工夫がさらに進むのでしょうか。なんか作るのも大変そうだし、もっと簡単に作る方に進んで行くと思います。

参考文献

『お札の館探検隊－なぜなぜ質問箱』国立印刷局、2012年
植村峻『お札のはなし－その歴史、肖像と技術－』一般財団法人印刷朝陽会、2006年
『貨幣の歴史学』日本銀行情報サービス局、2011年



おぼんについてのしゅうかん

板橋区立紅梅小学校４年　都原（とはら）　礼乃（あやの）

私は夏休みに、宮崎のおじいちゃん、おばあちゃんの家に行きました。そこでおぼんについての話をおばあちゃんから聞いたり、実際に、体験したりすることができました。

おぼんとは、８月13日に、亡くなった人を、お墓におむかえに行き、15日にまたお墓にかえすまでの期間のことです。

おばあちゃんの家には、おぶつだんがあります。13日の朝、おぶつだんをきれいにおそうじをし、いろいろな夏野菜、果物、かわいいおかしなどで亡くなった人におもてなしをします。その日の夕方、お墓にごせんぞ様をおむかえに行きました。おむかえから帰ると、ごせんぞ様のごはんを作りました。ごせんぞ様のごはんは小さなおぼんに、小さなお皿や小さなおはしがのせてあり、全部が小さいです。小さい入れ物だから、ごはんはたりるのかなと思いました。

おばあちゃんは毎日、ごせんぞ様に小さなお皿にごはんやおみそしるなどでおもてなしをして15日にお墓に送っていきました。

おばあちゃんはこんな話をしてくれました。おぼんは命の大切さを教えてくれる期間で、いなかに帰って家族でごせんぞ様のことを考えたり話したりする日であること。ばあちゃんにも、ばあちゃんがいる。そのばあちゃんにもばあちゃんがいる。つまり十代さかのぼれば、1,100人もの大切な命が私には流れていること。いじめを苦にして、命を落とす子供が最近ふえている。命とは一つしかない。大切なものである。「命」にはかぎりがある。だからこそ一日一日を大切に生きなさいと、教えてくれました。

私は今回おばあちゃんにいろいろ教えてもらい、亡くなった人をおむかえしておもてなしをし、またおくるおぼんという大切な期間のことを知ることができました。

よく考えてみれば、ごせんぞ様が一人でもいなかったから、今の私がいなかったことになります。一つだけの命でも、とても大切だったことが伝わってきました。

私はこれから一つだけの命を大切にし、命を大切にしない人が一人でもへらせれば、いいなと思いました。

中山道を歩いて

板橋区立志村第五小学校３年　陰山（かげやま）　泰成（やすなり）

ぼくは、中山道について調べました。理由は、テレビ番組を見て中山道の大宮宿のことを知ったからです。母が「中山道はいたばしくも通っているんだよ」と言ったので、調べてみることにしました。

すると、中山道の始まりは「日本ばし」で、いたばしくには「いたばし宿」という宿場町があったことが分かりました。今はどうなっているのか行ってみることにしました。

初めは、日本ばしに行きました。なぜかというと、日本ばしからいたばし宿まで歩いてみようと思ったからです。

今の日本ばしは石づくりでした。え戸時代は木ぞうだったそうです。日本ばしは今も車や人が多くにぎやかでした。

中山道の入口には三こし本店のライオンぞうがありました。三こしは、むかし「三井えちご屋」というごふく屋さんだったと父がおしえてくれました。ほかにも古くからつづいているお店がいっぱいありそうです。今ど行ってみたいと思いました。

歩いて神田まで行って、電車にのって新いたばしでおりました。いたばし宿の近くのえきです。本当は歩くつもりでしたが、いたばし宿までの9.8キロメートルを歩くのは今のぼくにはむりでした。理由は、歩くと中で足をいためたからです。え戸時代の人が何百キロも歩いたのはすごいなと思いました。

新いたばしから旧中山道のいたばし宿まで歩きました。いたばし宿は中山道の一番目の宿場町で、三つに分かれています。平お宿、仲宿、上宿の三つです。げんざいも仲宿の地名はのこっています。平おの名前は、交番にだけのこっていました。

いたばし宿は今は商店がいになっていて、多くの人がいました。ぼくもだんごを買って食べました。道はばはせまくて、十字路がほとんどありませんでした。え戸時代には車がなかったので馬でい動していました。十字路が少ないのは、出会い頭の事こがないようにするためだったそうです。今でもむかし町の形がそのままのこっているんだなと思いました。

いたばし地いきセンターに行きました。ボランティアの人にお話を聞きました。中山道やいたばし宿のてんじのほかに、「えん切りえのき」のてんじがありました。また、ボランティアの人が土地の高さの分かる地図を見せてくれた時、父が「え戸時代よりむかしに、近くにおしろがあったんだよ」と教えてくれました。し村じょうというそうです。土地の高い所に作られていたようです。

いたばし宿を歩いていくと、本じんあととわき本じんあとがありました。本じんは、大名がとまるごうかな家だったそうなので、ぼくもとまってみたかったなあと思いました。

地いきセンターで聞いた、えん切りえのきの所までいきました。木を見ていたら、となりのおそば屋さんのおじさんがおふだをくれました。おふだにねがい事を書いてひもにむすびました。おじいさんの話では、えのきはもともと交さ点のはんたいがわにあったそうです。今の木は三代目だとも言っていました。えん切りえのきは、いいえんはむすんでくれてわるいえんを切ってくれるそうです。今でも全国からいっぱい人がくると言っていました。

いたばし宿のと中、石神井川をわたりました。いたばしの名前の由来は、石神井川にかかる「いたばし」というはしです。いまはコンクリートですが、むかしは「いた」でできていたそうです。ぼくは木のはしをきたいしていたので、コンクリートでざんねんでした。

この日はもう夕方になったので、べつの日に自てん車でつづきを走りました。

しむらじょうのあとの神社によったあと、し村一里づかまで行きました。中山道をはさむように二つおかれていました。つかも木もとても大きかったです。今の木は三代目です。国のしせきです。中山道が工事で広くなっても、この一里づかはなくなりませんでした。なぜならもともと中山道から少し遠い場所にあったからだそうです。ぼくははじめて一里づかを見ました。え戸時代にはたくさんあったほかの一里づかが今はのこっていなくてとてもざんねんだと思いました。

ぼくの中山道のたびはここで終わりです。ぼくは電車や自てん車を使ったけれど、むかしの人はよく歩いたなと思いました。一里づかのような大きなものをたくさん、よくつくれたなとも思いました。そしてもっとたくさん、古い物をそのままのこしてくれたらいいのになと思いました。

母が東京都内にも本じんがのこっている所があるとしらべたので、行ってみたいです。それからこんどは家族で、いたばし宿からスタートする「川ごえかい道」というかい道を自てん車で走ってみたいです。

数字のない昔のお金

横浜市立日限山小学校２年　徳安（とくやす）　佑香（ゆうか）

１、はじめに

夏休みに横浜市歴史博物館へ行きました。帰るときにお土産で昔のお金をかってもらいました。コインで、形は丸くて四角い穴が開いていて、穴の周りに四つの漢字が書いてありました。わたしがもっている５円玉や50円玉とくらべてみると、にていると思ったけど全然ちがうことがわかりました。絵がありません。穴が丸くありません。そして、なんといってもふしぎなのはお金なのに数字が書いてないことです。それなのにどのくらいの価値があるのかどうやってわかるのでしょうか。このお金はつかえたのでしょうか。

２、道光通宝

まずは、買ってもらったお金をしらべました。お金には『道光通宝』と書かれていて、1821年と説明がありました。今から200年くらい前の江戸時代の終わりころです。日本で最初のお金が683年ということなので、1200年くらい経った時代のお金です。あんまり古くはありませんでした。でも、写真で見た最初のお金と『道光通宝』はそっくりです。1000年もの間に変化はほとんどなかったのでしょうか。

３、高額貨幣

もっといろいろ知りたかったので、東京にある『貨幣博物館』へ行きました。

『道光通宝』のようなお金は銅銭といいます。今のお金でいうと１円玉のようなものでした。でも、５円玉や10円玉のような、銅銭何個でいくらという高額貨幣がでてきたのは江戸時代に入ってからです。ということは、銅銭が登場してから約1000年の間、高額貨幣なしで買物をしていたということです。昔の人は銅銭の穴にひもを通して100枚を束にして持ち歩いていたそうです。博物館にはこの束がおいてありました。持ってみたらおもかったです。昔の人の買い物は大変です。1000年もの間高額貨幣を作ろうとしなかったのがふしぎです。

江戸時代に登場した高額貨幣は小判です。なんと銅銭4000枚分の価値です。小判だけでは使いにくいので４分の１の価値の一分金もありました。それでも銅銭1000枚分です。その他は銀のお金でいちいち重さをはかって使いました。なんかあまり便利になったような気がしません。1835年になってようやく銅銭100枚分の百文銭が登場しました。

お金に数字が書かれたのは小判や一分金が最初のようです。江戸時代に入っても銅銭や百文銭には数字が書かれていません。お金に数字が書かれるのは明治に入ってからです。お金に数字が書かれたのは最近のことで、数字が書いてあるのが当たり前と思っていた私の感覚がずれていたみたいです。

４、まとめ

今同じ形のお金を使って、当たり前に買い物をしているけれど、こんな風になるまでにいろいろな形のお金が生まれて、変化してきたことがわかりました。私が大人になるころにはお金はどうなっているのでしょうか。

参考文献

板倉聖宣・松崎重広『お金でさぐる日本史Ⅰ』国土社、1993年

板倉聖宣・松崎重広『お金でさぐる日本史Ⅱ』国土社、1993年

板倉聖宣・松崎重広『お金でさぐる日本史Ⅲ』国土社、1993年

えりぜに
「撰銭」ってなんだろう？

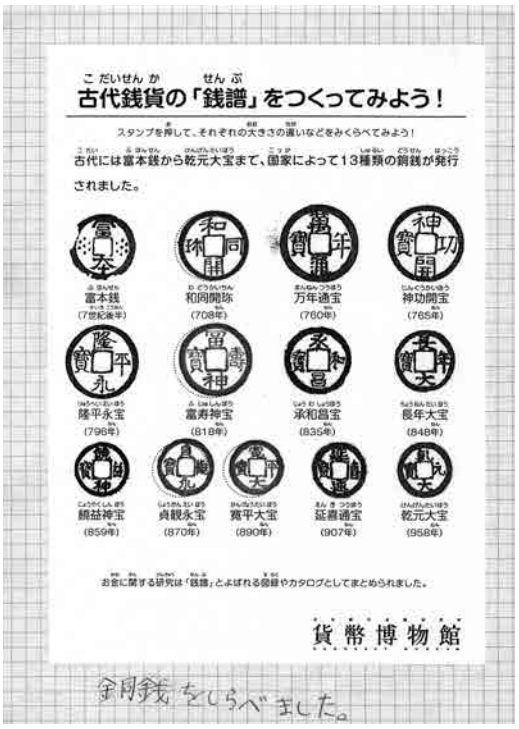
スタンプを押して銭貨のつくり(見た目)をくらべてみよう！

中世の日本で流通した銭貨には、中国の王朝によってつくられたものだけでなく国内外でそれをまねてつくられたものも多くありました。そのため同じ文字を持つ銭貨でもつくりに差があり、人々は銭貨を区別するようになりました（撰銭）。

永楽通宝は、中国（明）でつくられた銭貨で中国との貿易を通して日本にもたらされました。
東日本を中心に好まれ、税の額を永楽通宝で示す慣習もありました。

貨幣博物館

むかし①お金です。



こだいせんか　せんぷ
古代銭貨の「銭譜」をつくってみよう！

スタンプを押して、それぞれの大きさの違いなどをみくらべてみよう！

古代には富本銭から乾元大宝まで、国家によって13種類の銅銭が発行されました。

富本銭（7世紀後半）
和同開珎（708年）
万年通宝（760年）
神功開宝（765年）
隆平永宝（796年）
富寿神宝（818年）
承和昌宝（835年）
長年大宝（848年）
綜益神宝（859年）
貞観永宝（870年）
寛平大宝（890年）
延喜通宝（907年）
乾元大宝（958年）

お金に関する研究は「銭譜」とよばれる図録やカタログとしてまとめられました。

貨幣博物館

金属銭をしらべました。